

思へハコソ今談判シツツアルノテ、此考カ無ケレハ始メカラ相談等ハセスニ日本ノ思フ儘ニ行動シタノデア
ル。

民國對滿政策コソ帝國主義ノ權化

支那其後ノ態度ハ益々傍若無人テアル、我國カ日露戰後更ニ非常ナ努力ト犠牲トニ依ツテ贏チ得タ滿洲ノ
秩序ト開發サレタ富源トヲ見テ垂涎措ク能ハス、例ニ依リ空手テ之レヲ奪ヒ去ラント欲シ、日本ニ對スル凡
ユル惡宣傳ヲ單ニ國內ノミナラス世界ニ向ケテ放送シテ居ルカ、此陋劣ニシテ貪慾ナ手段コソ帝國主義ノ發
露ニ外ナラス、希クハ支那ニ大局ヲ見得ル爲政治家カ出テ此自儘勝手ナ帝國主義ノ歸着ハ、必スヤ先キノ二戰
役ト同シ運命ニ遭フコトヲ理解シ此基礎テ日支ノ關係ヲ立テ直ササル限り、兩國ノ友好、親善ハ決シテ其歩
ヲ進メ得ヌ事ヲ自覺スル日カ一日モ早ク到來センコト衷心祈念ニ堪エヌ。

第十章 獨逸ノ極東政策

三 國 干 涉 ト 獨 逸

露國ノ行動ヲ中心トシテノ極東問題ノ成行ハ、既ニ之レヲ縷述シタカ、本章テハ獨逸ノ行動ヲ中心トシ
テ、少シク研究シテ見度イト思フ。

獨逸カ極東ニ深ク足ヲ踏ミ入レタノハ、云フ迄無ク日清戰爭ノ時カラテ、陸奧外相スラ獨逸ハ殆ント主唱
者ノ如キ位置ヲ占メ三國聯合ニ關係シタト云フテ居ル。當時ノ形勢カラ考ヘテ獨逸カ加ハラナカッタラ、日
清戰後ノ干渉ハ或ハ實現シナカッタアラウ。又在京獨逸公使ノ態度カアレ程テナカッタラ、獨逸ニ對スル
日本ノ見方モ異ナツタカト思ハレルカ、明治二十八年四月二十三日ニ三國公使カ外務省ニ來テ、陸奧外務大
臣ハ當時舞子ニ辭養中タツタノテ、林次官ニ勸告覺書ヲ提出シタ時、露佛兩國ノ公使ハ外ニ何ノ説明モ附加
エナカッタノニ、獨逸公使丈ケハ左ノ如キ長々シイ陳述ヲシタ。

此宣言ニ付キマシテ次ノコトヲ申上ル様ニ云ヒ付ケラレマシタ。現今日清事件ノ最初ヨリ本國政府カ貴國
ニ對シテ其懇親ナル心ノ證據ヲ顯ハシタノハ唯一度ノ事テナイト存シテ居リマス。御承知ノ通りニ昨年十
月七日ニモ英國政府カ歐洲各國ニ日清事件ニ干渉スルコトヲ申込シタカ、其節獨逸國カ日本國ニ對シテノ
懇篤ニ依テ斷リマシタ。夫カラ又當年三月八日ヲ以テ本公使カ本國ノ命令ニ從テ貴國政府カ夥多ノ請求ヲ

ナサラナイテ成ルヘク早く講和ヲ結フ様ニ御勸告致シマシタ。其時ニ申上ケマシタノハ歐洲ノ諸國カ清國ノ願ヒニ應シテ干涉致スカモ計ラレマセスト云フコトニ依テ、日本國ハ若シ夥多ノ請求ヲセスシテ早速講和條約ヲ締結ナサルナラ、却テ其方カ利益カアルテアロウト云フコトヲコサイマシタ。夫レニ續テ日本國若シ大陸ノ土地ノ割讓ヲ要求スレハ、之レハ最モ干涉ヲ惹起スヘキ要求テアルタロウト申述ヘマシテモ、貴國テハ此利己心ナキ勸告ニ應シマセンテコサイマシタ。現在ノ日清講和條件ハ全ク度ニ過キテ歐洲諸國ノ利益上ニト並ニ假令幾分カハ少ナシト雖モ亦獨逸國ノ利益上ニモ害カ在ルト認メマス、夫レ故ニ現今ハ本國皇帝陛下ノ政府モ俱ニ抗議ヲ提出シナケレハナリマセヌ。且ツ必要カアル場合ニハ其抗議ヲシテ有効ニナラシメルコトモアリマシヨウ。三國ニ對スル戰ハ所詮日本國ニ望ミノナイコトテアルカ故ニ、貴國此事件ニ付キマシテハ讓ルコトカ出來ナイコトハナカロウト存シテ居リマス。尙ホ日本政府カ名譽ヲ失フコトナクシテ今ノ地位ヨリ退ソクコトノ途ヲ講スル爲ニ「コンフエレンス」ヲ開ク等ノコトヲ望マルレハ、其旨ヲ電報ニテ本國政府ヘ送ルトノ内訓ヲモ受ケテ居リマス。

獨逸公使「フォン、グットシュミット」氏カ爲シタ右ノ陳述ノ内容ハ、四月十七日ニ獨逸外務大臣カラ同公使ニ對シ、「在獨露國大使ハ日本ヘノ勸告案ヲ内示シタ、貴官ハ露佛公使ト共ニ同趣旨ノ勸告ヲ日本ニ申入ルヘシ」ト訓令シタ電報ニ引キ續イテ、同公使ノ會談ヲ調整スル爲前電ヲ補足スルト前書キシテ發セラレタ二通ノ電報ニ悉ク含マレテ居ル。此二通ノ電信ヲ書タ「フォン、ホルシュタイン」參事官ハ多分右ノ様ナ容態ヲ勸告覺書ヲ補足サセル爲ニ打電シタノテハ無イト常識上想像サレルカ、併シ「フォン、グットシュミット」

公使ハ其報告書ニ此補足ヲシタ事ヲ誇リ顔ニ述ヘテ居ル。親シク衝ニ當ツタ林次官カ如何ニ不愉快テ在ツタカハ敢テ多言ヲ要セヌカ、明治四十年七月林伯カ外務大臣在任中、時ノ獨逸大使「フォン、ムム」男ト日佛協約成立ニ關聯シテ會見シタ際、談偶々三國干涉ニ及ヒ、林外相ハ當時ノ感慨ヲ述ヘテ、勸告覺書提出ノ時露佛公使ハ何モ言ハナカツタノニ、獨逸公使丈ケカ追加陳述ヲ爲シ、日本カ此勸告ヲ聽カナケレハ戰爭ノ危險カ在ルト迄極言シテ脅迫ノ態度ニ出タノテ甚タ心外ニ思ヒ、他ノ二國ノ聲明振ヲ指摘シタラ、獨逸公使ハ武力使用ニ關スル一節ヲ取消シタカ、之レカ言葉ノ上丈ケテ在ツタナラ取消セハ水ニ流スコトモ出來ルケレト、同公使ノ陳述ハ同時ニ書キ物ヲ受取ツテ居ルト語ツタ。「フォン、ムム」大使ハ之レヲ政府ニ報告シタラ、此報告書ヲ讀ンタ「フォン、ビュロー」宰相ハ其一隅ニ「フォン、グットシュミット」ハ斯程迄云フヘキ訓令ヲ受ケテ居タカ書類ヲ見度シ、彼ハ感情的ノ人物ナルヲ記憶ス、若シ林外相カ之レニ關スル真相ノ報知ヲ要求セハ、彼ハ訓令ヲ超越セリト答フルコト可ナリ、ト注記シテ居ル。

青木 公使ノ迷蒙

「フォン、グットシュミット」公使ノ陳述ハ其態様ニ於テ亦之レヲ述ヘル時機ニ於テ甚タ要領カ惡カツタニ相違ナイカ、陳述中ニ擧ケテ居ル英國ノ干涉提議ニ獨逸カ加ハラナカツタ事ト、日本ノ要求過重ノ場合ニ干渉來ノ豫報ヲシタ事ハ、獨逸カ幾度モ指摘シテ我ニ恩ヲ着セタ事柄ヲ、獨逸外相ハ青木公使ニ對シテ獨逸ハ昨秋來日本ニ對シテ充分ノ厚意ヲ示シ歐洲諸國干涉ノ企ヲ破リ且其他種々ノ方法テ日本ヲ助ケタノニ、日本

ハ其報酬トシテ何事ヲモ爲サス獨逸ノ利益ヲ増進セスト云ヒシ後、日本カ外交上ノ慣例ニ背キ自儘ノ處置ニ出タルヲ非難シ、世界ハ決シテ日本ノ希望又ハ命令テ動クモノテ無イト放言シタソウタ。之レハ明治二十八年四月二十日ニ出タ青木公使ノ電報中ニ掲ケテアルカ、此電信ノ終リニ同公使ハ左ノ意見ヲ附記シテ居ル。本使ハ豫メ諸強國ノ交誼及厚意ヲ失ハムコトノ危險ヲ恐レ、獨逸及其他諸國ニ對シ我ヨリ信任ヲ置ク事ヲ示シ、以テ其友誼上ノ助ケヲ得サル可ラサルコトヲ開陳セシカ、貴大臣ヨリ之レニ對シ何等ノ訓令又ハ回答モ無カリシ。又講和ノ件ニ就テハ本使ハ日本カ其講和條件ヲ委シク獨逸政府へ通知セサルヲ得サル旨申述ヘタリ。然ルニ之レニ對シテ何等ノ貴答モナシ。

日本政府ハ獨逸ノ厚意ニ答フルコトヲ忘リタル爲、今ヤ獨逸ハ日本ニ反對シテ他諸國ト共ニ運動スヘシト言明セリ。加之獨逸ハ曩ニ既ニ平和ノ條件ヲ輕減セラレ度旨日本駐劄獨逸公使ヲ經テ貴大臣ニ勸告シ以テ清國ヲ保護セリ。右獨逸ノ姿勢タルヤ實ニ容易ナラサルコト故、之レニ對シ相當ノ處置ヲ執ラレムコトヲ希望ス。

陸 奧 伯 ノ 觀 測

右獨逸ノ態度及之レニ關スル青木公使ノ意見ニ對シ、時ノ外務大臣陸奧伯爵ハ蹇蹇錄中ニ大要左ノ如キ反駁ヲ加ヘテ居ル。

明治二十七年十一月ノ頃英國政府カ聯合干涉ノ事ヲ歐洲各國ニ提議スルニ方リ、獨逸ハ首トシテ之レヲ拒

絶シタリトテ其後頻リニ我國ニ對シ德色アリシ。然レトモ英國ノ聯合干涉ハ英國ノ輿論之レニ反對セシ程ナレハ、到底實際ニ成立ツヘキモノニ非ス。又二十八年三月八日獨逸公使ハ本國政府ノ訓令ニ依リ講和條件ノ適度ナラムコトヲ我ニ勸告シ、清國ハ歐洲諸強國ノ干涉ヲ要求シ、二三強國ハ大體之レニ同意シ且互ニ約束スル所アルカ如シ。獨逸政府ノ接受シタル報告ニ依レハ日本ハ清國大陸ニ於テ割地ヲ要求スルカ如シ。是レ必ス干涉ヲ惹起スルノ媒介タルヘシ、トノ口上書ヲ提出セリ。然レトモ此時我廟議ニ於テ清講和ノ條件ハ既ニ確定シタル後ナレハ、容易ニ之レヲ變更スヘカラサルノミナラス、從來日清事件ニ關スル獨逸政府ノ言行往々倚信シ難キノ感覺ヲ有シ居タル際ナレハ、其勸告ニ對シ實ハ餘リ重キヲ置カサリシニ、彼等ハ他日ニ至リ日本カ此勸告ニ省ル所ナク自儘ナル振舞ヲ爲シタルカ故ニ、遂ニ三國ノ干涉ヲ招キタリト喋々セリ。然レトモ當時我政府ニ向ヒ之レト類似ノ勸告ヲ爲シタルモノ豈ニ獨逸ノミナラムヤ、且ツ假令我ニ在ツテ獨逸ノ勸告ニ對シ謝意ヲ表スルコトハ或ハ足ラサリシトスルモ、之レカ爲獨逸ヲシテ俄ニ三國干涉ノ主唱者トナリ、露國ハ兎モ角モ其舊怨深キ佛國トサヘモ相聯合シテ日本ニ反對スル迄モ豹變セシムルノ理由モ無キカ故ニ、余ハ最初ヨリ獨逸ノ豹變ハ必ス別ニ歐洲政略的ノ關係ヨリ所謂背ニ腹ハ代ヘ難シトノ俗諺ニ恰當スル事情ノ存スルモノナキニ非サヤト疑ヘリ。且ツ此豹變ハ事頗ル急遽ニ成立セシモノト見エ、四月六日青木公使ハ余ニ向ヒ講和條件ハ既ニ洩レタリ、獨逸政府ハ別ニ重要ナル異議ナシト云ヒ、又同月十二日ニモ尙ホ同公使ハ講和條約ノ條件ハ歐洲新聞上評判宜シキ方ナリ、特ニ價金ニ付テハ假令一層巨額ナリシモ決シテ異議ナカリシナルヘシ。又割地ノ要求モ貴大臣ハ固持シテ動かサレサ

ル方宜シカラムト電報シタル程ナルニ、其翌十三日ニ至リ同公使ハ余ニ急電シ、若シ日本ニシテ清國ヨリ特別ナル經濟的利益ヲ求ムルニ於テハ獨逸ト雖モ亦之レニ反抗スヘシ。獨逸ノ懇切ナル意思ニ對シ日本ハ諸事詳カニ獨逸政府ニ通知スヘキ責務アリ。因テ一般ノ激昂ヲ和クル爲本使へ報告ヲ與ヘラレタシ、ト申越セリ。僅々一日ヲ隔テテ前後電信ノ意味斯ク迄ニ矛盾スルハ抑々何故ナルヤ。是レ將ク獨逸カ其政略上轉機ノ必要ヲ生シタルニ非スシテ何ソヤ。元來東方亞細亞ニ於テ常ニ商業ノ壟斷ヲ之レ謀ルハ英國ニ若クモノハナシ。而モ英國スラ今回ノ講和條件ヲ見テ頗ル好感情ヲ抱キ居リシ程ナレハ、獨逸ノ通商上何等ノ障害アルヘキ筈ナキハ勿論ノ事ナリ。

四月二十日發青木公使ノ電信ヲ見タル余ハ尙ホ我政府ノ怠慢ヲ咎ムル如キ口氣アルヲ甚ク解シ難ク感シタリ。余ハ獨逸カ斯ク俄ニ豹變スルニハ其表面ニ云々スル外必ス別ニ何か自ラ已ム能ハサルノ事情ノ存スルアリテ然ルナラムト疑ヒタレハ、此際獨逸ニ對シ其決意ヲ飜サシメムトスルモ其詮ナカルヘシ、寧ロ暫ク彼等ガ如何ニ運動シ來ルヲ待ツニシカスト思ヒタリ。果然余ノ疑團ハ平素獨逸ト最モ親密ナル他ノ歐洲ノ一國ヨリ暴露シ來タレリ。即チ四月二十七日在伊高平公使ノ來電ニ依レハ伊國外相ハ同公使ニ對シ、獨逸ハ初メ伊國ノ協同ヲ望ミタレトモ伊國ハ之レヲ謝絶シタリ。今回獨逸ヲシテ斯ク變動セシメタル底意ハ全く因テ以テ歐洲大陸ノ政略上佛露ノ同盟ヲ遮斷シ、遂ニ佛露ヲシテ孤立ノ地位ニ立タシメムト欲スルニ在リ。然レトモ獨逸ガ餘リニ深ク露國ト結託シテ威力ヲ逞クスルニ至ルハ亦之レヲ默視スヘカラス。或程度ニ於テ其勢力ヲ制限スルヲ要ス。斯ル事情ナルヲ以テ若シ英伊米ノ三國ヲ合同シテ日本ニ味方スルニ至ラ

シムルコトヲ得ハ、干涉問題モ亦由々シキ大事ニ至ラス終局ヲ見ルヲ得ヘシ。元來今回ノ事件ハ頗ル狂言的ノ出來事ナル故、獨逸ト伊國ハ毫モ三國同盟ニ抵觸セシテ彼此反對ノ地位ニ立ツヲ得ヘシ、ト語レル由ナリ。此伊國外務大臣ノ言語ハ甚タ明カナリ、獨逸ノ豹變ハ實ニ露佛關係ノ熱度益々加ハラントコトヲ恐レ自ラ其間ニ投シテ之レヲ冷却セムト欲シタルニ在リ。是レ寧ロ自家ノ死活ニ關スル事情ニ驅ラレテ亦他ニ顧スルニ遑ナカリシニ由ルモノナリ。左レハ伊國外務大臣カ毫モ三國同盟ニ抵觸セス彼此反對ノ位置ニ立ツヲ得ヘシトノ一言ハ外見甚タ奇異ニシテ且ツ餘リ大膽ナルニ似タレトモ、歐洲外交上虛々實々ノ存スル所、形勢ニ於テ亦アリ得ヘカラサル事ニ非サルヘシ。

獨逸カ露國ニ同盟シタ狂言的外交ハ在英獨逸大使ノ舌頭ヨリ亦白狀セラレタリ。四月三十日加藤公使ノ來電ニ依レハ昨二十九日獨逸大使ノ求メニ依リ會見セルニ、同大使ハ露國ノ感情益々激昂シ、佛國ハ今日トナリテハ最早同盟ヲ去ラント欲スルモ之レヲ爲シ能ハサルノ位置ニ陷レリ。獨逸ハ是迄ハ勿論今尙ホ日本ニ對シ友情ヲ懷キ居ルカ故ニ、圓滑ニ本件ヲ終了セシメムト欲スル情甚ク切ナリト云ヘルニ依リ、本使ハ若シ獨逸カ果シテ斯ク迄ニ日本ニ對シ友情ヲ有スルニ於テハ、何故ニ今回ノ干涉ニ加盟シタルヤト詰問シタルニ、同大使ハ夫レトハ明言セサレトモ暗ニ歐洲關係ノ政略カ獨逸ヲシテ此同盟ニ加ハラシメタル眞實ノ原因ナリトノ事ヲ云ヒ表ハセリ。又之レト同時ニ大使ハ獨逸カ同盟ニ加ハリタルハ日本ノ爲ニ幸ナリ。何トナレハ獨逸ハ露佛兩國ニ説キテ大ニ其要求案ヲ輕減セシメタレハナリト告ケ、日本カ遼東ノ一時占領ニテ満足センコトヲ勸告スルト同時ニ、所謂一時占領ハ將來何時モ永遠ノ占領ニ變換スルヲ得ヘシト云ヒ

幾多ノ先例ヲ示シタル後、永遠ノ占領ト迄至ラサルモノニシテ日本ニテ承諾スヘキ取捌方アラハ、本使ヨリ通知次第其結了ニ努力スヘキ旨本國政府ニ申立ツヘシト附言セリトノ事ナリ。此言語ハ決シテ獨逸大使一個ノ私見ニ非サルコト明カナリ、然レトモ獨逸政府カ何故ニ適當ノ行徑ニ由ラスシテ、故ラニ倫敦ニ於テ遼東等ノ問題ヲ協議セシメントシタルカ頗ル疑フヘキ事ナリ。加之彼ハ夫レトハ明言セサルモ暗ニ歐洲關係ノ政略カ獨逸ヲシテ之レニ加盟セサルヲ得サラシメタル真因ナリト洩ラシ、又日本ハ兎モ角モ遼東半島ノ一時占領ニ満足シ置クヘシト勸告シ、一時占領ハ何時モ永遠ノ占領ニ變換スルヲ得ヘシトノ前例迄モ示シタル助言ノ如キハ、獨逸カ當時露國ノ一同盟者タルノ位置ヨリ云ヘハ、殆ント獅子身中ノ虫ニ類セサルカ。

陸奧伯ハ又明治二十八年五月八日附在露西公使ノ報告ヲ蹇々録中ニ掲ケ、露國政府カ今迄極東ノ危勢逼迫セルニ拘ラス、歐洲強國ノ關係如何ヲ顧慮セサル可ラサリシ爲、彼此ノ事情互ニ相制シテ其真意ヲ露骨ニ表明スルヲ避ケテ居タカ、下ノ關係約一度ヒ世上ニ顯ハレ獨佛兩國トノ提掣成立スルヤ、彼等ハ俄然假面ヲ脱却シ爪牙ヲ暴露シタ、此真相モ亦獨逸カ三國干涉ニ加ハルニ至ツタ理由モ同報告テ闡明サレタト述ヘテ居ル、其拔萃ハ左ノ通りテアル。

露國カ遽ニ干涉スルニ決シタルハ全ク獨逸ノ同盟ヲ得タルニ由ル。蓋シ英既ニ干涉ニ意ナク、佛亦事已ニ遲シトシテ逡巡シ、露國政府部内ニテモ威海衛ノ陥ル迄ニ干涉スヘキ筈ナリシニ、今日ニ至リテハ假令佛ト共ニ海軍ヲ以テ日本ニ迫ルモ、之レヲ支持スル陸兵ナキ以上ハ如何トモスル能ハサルヘシトノ説ヲ持スル者多カリシハ事實ナリ。四月初旬「ロバノフ」外相ニ我講和條件ノ概要ヲ内告セル際、同外相モ殆ント納得シ地圖ヲ取出シテ其區域ヲ研究セル後安心シタル風ニテ、然ラハ其ノ趣ヲ添ヘテ帝ニ報告スヘシト答ヘタリ。(後金州一部ヲ爭フ時ニ之レヲ引用シタルモ「ロバノフ」氏ハ賛成ハセサリシト答ヘシニ依リ、默認ニ相違ナカリシト詰リタルモ事言辭ノ爭論ニ終レリ)是等固ヨリ同氏ノ故意ニ出テシ事ニモ非スシテ、全ク當時同氏モ既ニ致方ナシト諦メ居タルヲ示スモノト思ハル。然ルニ下ノ關係約成立ノ電報達スルト間モ無ク、獨亦露佛ニ共同シテ此條約ニ抗スヘシトノ説傳ハリ、急ニ干涉說勢ヲ得ルニ至リタルカ、四月十九日獨ハ政府ニ於テハ尙ホ三國相談中ナリシト見エ外務大臣モ未タ決定スル所ナカリシカ、右ノ相談急ニ纏リシモノト見エ、其日カ翌日カニハ遂ニ各其在京公使ニ訓令ヲ發スルニ至リタル由ナリ。

右干涉ニ關シテ本使外務大臣ト對談中、本使ヨリ若シ露國ニ於テ日本ヲシテ大陸ニ土地ヲ得セシメサル決心ナリシナラハ、是迄幾回モ之レニ關シテ話シタル事アリシニ、何故豫メ早ク之レヲ云ヒ出ササリシヤト詰問セルニ、「ロバノフ」氏ハ實際日本カ彼土地ヲ押領スヘシトハ思料セサリシト答ヘ、又亞細亞局長ハ右ニ付テハ「ヒトロゾヴォ」公使ヲシテ公然質問セシメタルニ、東京ニ於テハ其時ニ成リテ自ラ答フヘシトテ之レヲ言フヲ欲セサリシト語り、罪ヲ我ニ轉嫁セントスルモ、右ハ孰レモ後日ノ口實ニ過キスシテ、其實彼等モ自ラ獨逸ノ共同シテ干涉ノ勢力ヲ得ヘキヲ思料セサリシ故、事ノ結果如何ヲ顧慮シテ答フルヲ得ス、從テ之レヲ言フヲ得サリシモノニテ、右獨逸ノ舉動ノ意外ナリシニハ露國人迄モ驚キタル程ナリ。今其此ニ決シタル所以ニ關スル一説ニ、獨逸ハ兼テ露佛同盟ノ親密ナルヲ嫌ヒ居ル處ニ、本年夏舉行ノ

「キール」運河開通式ニモ佛國ハ其ノ軍艦ヲ派遣スルノ意ナキヨリ、益々之ヲ憂ヒ居タルヲ、露國ノ周旋ニ依リ遂ニ獨逸ノ希望ヲ達セシメタリ。恰モ日清戰爭結局ノ難問題起リ、英退キ、露窮スルヲ見テ、獨逸ハ之レヲ好機會トシテ遽カニ合同シ、謝意ヲ示シタルナリト、其眞僞素ヨリ審カナラス。

青木公使ノ意見ニ對スル西園寺臨時外相ノ應酬

青木公使ハ明治二十八年五月二十七日附テ獨露佛三國干涉一件ト題スル公信ヲ外務大臣ニ送り、自己ノ行動ヲ擁護スルト同時ニ、政府ノ措置ヲ批判シタ、之レニ對シテ西園寺外相臨時代理カラ同年八月十七日回答カ出テ居ル、前掲蹇々録ノ記述ト重複スル所モ尠ナクナイカ、隨分放膽ニ忌憚ナク政府ノ所見ヲ縷述シテ居ルカラ、之レヲ左ニ拔萃スル。

日清講和條約ニ對シ獨露佛三國干涉一件ト題シ、去五月二十七日附公信ヲ以テ御申越候次第八、閣下カ多年ノ外交上智識ヲ發揚セラレタル結果ニ屬シ、我外交上ノ參考トナルヘキ廉少ナカラス、有益ナル報告ト相認候付、例ノ通り直チニ上奏ヲ經、併セテ閣僚ヘモ相示シ置候。

然ルニ右御意見ノ内ニハ、往々當時ニ於テ我政府カ抱持シ居リ、又實地ニ施行シ來リタル意見ト、符合セサル廉少ナカラサルノミナラス、昨年以來閣下カ時々電報セラレシ所ニ對シテモ、動モスレハ相撞着矛盾ノ觀ナキ能ハス。事全ク事後ニ屬シ、今更論難スルニ及ハサレトモ、一ニハ以テ此誤解ヲ防キ、二ニハ將來閣下ノ御參考トモ可相成ト存候ニ付、左ニ一々縷陳致候。

抑々閣下ニモ御承知ノ通り、維新以來我政府外交上ノ方針タルヤ、未タ曾テ歐洲中ノ或強國ト、終始利害ノ關係ヲ共ニセントスルカ如キ位置ヲ占メタルコト無之ノミナラス、今回ノ事件起リタル後ニ至リテモ、當初歐洲各國ハ、日清兩國ノ強弱如何ト傍觀シ、往々最後ノ勝利ハ清國ニ屬スヘシトノ想像ヲ抱キタルモノ多カリシニ際シ、我ヨリ進ミテ或一國ニ協力ヲ求ムルハ、當ニ得策ニ非サルノミナラス、其實行ヲ見ルニ難キ次第ナレト、今日ニ至テ之レヲ答ムルハ、只タ事後ニテ事前ヲ評スルノ空言タルニ過キサルヘシト存候、併シ英國ニ對シテハ日清ノ開戰ノ始メ恰モ閣下カ倫敦ニ御駐在中ノ頃ヨリ、其同情ヲ得ンコトヲ努メ、多少其効驗アリタルコトハ閣下ニモ御承知相成居候コトト相信候。

然リ而シテ獨國カ三國干涉ノ主唱者トナリタル義ニ付、今回閣下ヨリ御申越ノ趣ニヨレハ、大要左ノ事實ニ基因スルモノノ如ク相見ヘ候。

第一、今回干涉ノ眞ノ原因ハ、佛國若シ獨國ニ先チテ着鞭シ、露國ニ假スニ有力ナル聲援ヲ以テセシナラシニハ、露佛ノ同盟忽チ成就シ（筆者曰、露佛同盟ハ一八九一年ニ成立シ、翌九二年ニハ軍事協定成リ、九三年ニハ同盟新條約締結セラル、而シテ青木公使ハ明治二十八年即一八九五年ノ執筆ニ係ルモノナリ）、獨國ハ危殆ノ地ニ立ツカ故ニ、露佛未タ相提携シテ日清講和條件ニ抗議ヲ試ミサル以前ニ、獨國自ラ率先シテ露佛兩政府ニ交涉シ、遂ニ三國一致ノ抗議ヲ我政府ニ提出セシメ、以テ獨國危殆ノ地ニ立ツコトヲ免レントスルニ在リ。

第二、直接ノ原因ハ「フォン、ブランド」氏ノ譏誣アリタルコト。我政府ニ於テ軍艦及ヒ武器ヲ獨國ヨリ

購入セサリシコト。獨國皇帝ニ對シ我政府ハ菊花章頸飾御贈進ノ外頗ル冷淡ナリシコト。獨國皇帝英國ノ發議ニ係ル干涉ヲ退ケラレタルニ、之レニ對シ謝詞ヲ送ラサリシコト。菊花章頸飾御贈進ノ答禮トシテ、獨國皇帝ヨリ贈進セラレタル黑鷲勳章ノ頸飾捧呈ノ爲、獨逸公使ヲ廣島ニ於テ引見アラセラレサリシコト。並ニ菊花章頸飾御贈進及「メツケル」少將敍勳ノコトニ關シ、東京某新聞ニ於テ云云セシコトニ在リ。

然ルニ獨國ノ意嚮如何ニ付テハ、當初ヨリ閣下ノ電報ハ、總ヘテ獨國カ我ニ對シ只管好意ヲ有シ居ルコトヲ報道スルモノニシテ、今之レヲ列舉スレハ大略左ノ通りニ有之候。

九月二十四日ノ來電ニ曰ク、閣下ハ露佛ノ意向ヲ詳知シ居ラルルヤ、本使ハ歐洲ニテ何か相談中ナリト思考ス。多分兵力干涉ノ議ニ關シ意見ヲ交換スルモノナルヘシ。果シテ然ラハ英國及獨國ハ其發起者ニ非サルコトハ本使ノ信シテ疑ハサル所ナリ。

十月二十一日ノ來電ニ曰ク、本使ハ英國駐劄獨逸大使ニ向ツテ、日清兩國ヲシテ自ラ勝敗ヲ決スル迄戰ハシムヘント告ケタリ。之レカ爲獨國ハ英國ノ仲裁即チ干涉政策ニ反對セリ。露佛兩國モ同シク反對シタレトモ、其主意ハ自ラ獨國ト異ナレリ。

十一月十一日ノ來電ニ曰ク、獨國ハ我カ爲ニ仲裁ニ反對シ、固ク執ツテ動かス。

十一月二十日ノ來電ニ曰ク、獨國政府及人民ハ開戰ノ始メヨリ日本ニ對シ同情ヲ有セリ。

十一月二十六日ノ來電ニ曰ク、獨國ハ仲裁ヲ爲スコトハ甚タ不適當ナリトテ、斷然之レヲ拒絕セリ。

本年一月三十日ノ來電ニ曰ク、獨國皇帝内密ニ本使ニ告ケテ曰ク、英國ハ清國ノ歡心ヲ得ント努メツツアルカ、其笑止ナルコト恰モ露國カ日本ノ歡心ヲ得ント勉ムルト同シ。

此ノ如ク最初ヨリ好意ヲ有シ居レリト稱スル所ノ獨國ニシテ、而カモ帝國ハ其希望ニ反シテ清國現朝ノ滅亡ヲ來スカ如キ事ヲ極端マテ壓着ケタルコト（十一月十三日接貴電）モナキニ、俄然其方針ヲ一變シ我ニ對シテ聯合干涉ノ牛耳ヲ執ルニ至リシハ何か深キ理由ナクンハアラスト相疑ヒ居候得共、閣下ヨリ右干涉起ラントスルニ際シ送ラレタル電信ハ左ノ通ニ有之候。

四月六日ノ來電ニ曰ク、講和條件ハ既ニ知ラレ居レリ、獨國政府ハ別ニ何モ重要ナル申條ナシ。

同十二日ノ來電ニ曰ク、貴大臣ノ原案ノ條件ハ歐洲諸新聞上評判宜シキ方ナリ。殊ニ償金ニ付テハ假令其金高一層巨大ナルモ、決シテ異議ナカリシナルヘシ。又土地ノ要求ニ付テモ貴大臣ハ固ク執ツテ動かレサル方宜シカラント本使ハ希望セリ。

又翌十三日ノ來電ニ曰ク、若シ貴大臣カ清國ニ對シ特別ナル經濟上ノ利益ヲ求メハ、獨國ト雖モ烈シク之レニ反對スヘシ。獨國ノ親切ナル意向ニ對シ日本國ハ獨逸國ヘ委曲ヲ通知スヘキ義務アリ。

又十七日ノ來電ニ曰ク、日本國カ通商上ノ利益ヲ占メタリトノ推量ハ一般ノ畏懼ヲ惹起セリ。獨國ハ甲鐵艦一隻及巡洋艦一隻ヲ東洋ニ派遣スルコトニ決セリ。

右諸電ノ如ク只單ニ通商上ノ利益ヲ壟斷スルカ如キ舉アルトキハ、獨國ノ反對ヲ受クルヘシトノコトヲ申來ラレシノミニテ、獨國政府ノ意向ヲ變セシコトニ付テハ何等御來報無之、而シテ獨國ノ方針頓ニ一變シ

干涉ノ計モ既ニ熟シタル頃合、即チ四月二十一日(十九日發)ノ來電ハ左ノ如ク云ヘリ。

最後ノ貴電ヲ受取り獨國外務大臣ニ面晤セシニ、同大臣ノ意向俄ニ變シ、本使ニ告クルニ、日本國カ旅順口ヲ取ルコトニ付困難ニ陥ルヘシトノ事ヲ以テセリ。(中略)同大臣明言シテ曰ク、余ノ意見ニテハ獨國ハ閣下ノ依頼ニ依リ且ツ皇帝ノ勅命ニ從ヒ、昨秋既ニ日本國ニ對シ充分ノ好意ヲ示シタリ。獨國政府ハ歐洲干涉ノ企圖ヲ破リタリ。且ツ其他種々ノ方法ヲ以テ日本國ヲ援助セリ。然レトモ日本國ハ其報酬トシテ何事ヲモ爲サス。獨國ノ利益ヲ伸張セス、剩サヘ獨國及他歐洲諸國ノ通商上ノ關係ヲ見ルコトナク、清國ニ對シ講和條件ヲ示命セリ。之レニ依ツテ獨國ハ最早歐洲諸協同ノ運動外ニ居ルコト能ハスト告ケタリ。(中略)又獨國外務大臣ハ日本國カ外交上ノ慣例ニ背キ自儘ノ處置ニ出テタルコトヲ大ニ非難シ、且ツ曰ク、世界ハ決シテ日本ノ希望又ハ命令ニ依リテ動クモノニ非スト。

右獨國外務大臣ノ申分ハ先前ノ好意ヲ抱ケリト云ヒ、少ナクトモ好意ヲ抱クカ如ク表示セシ所ト相對比スルトキハ甚タ意外ノ事ニシテ、突然斯ル事ヲ申出ツルニハ彼ニ於テ別ニ何か自家政略上ノ必要ヨリシテ、俄ニ其政略方針ヲ豹變シタルモノニシテ、其申分タルヤ詰リ之レヲ以テ口實ト爲セシニ過キサルモノナリシトハ大抵推測ヲ下サレ得ヘキコトト被存候得共、惜哉當時ニ在テハ閣下ヨリハ今回ノ貴信中ニ詳述セラレタル所謂眞ノ原因、即チ獨國ノ變心ハ全ク露佛ノ間ヲ離間セントスル歐洲政略ノ爲ナリトノコトニ至リテハ一言タモ御申越無之、反テ右電信ニ左ノ如ク附記シテ帝國政府ノ失錯ヨリ、獨逸政府ヲシテ斯ル變心ヲ生セシメタルカ如クニ御申越相成候。

本使ハ兼テ諸強國ノ交誼及厚意ヲ失ハントノ危險アルヲ恐レ、獨逸國及其他諸國ニ向テ我カ信任ヲ示シ、以テ其友誼上ノ援助ヲ得ルノ必要ヲ述ヘタレトモ、貴大臣ヨリ之レニ對シ何等ノ訓令又ハ回答タモナカリシ。又講和ノ件ニ付テハ本使ハ日本國カ其講和條件ヲ委シク獨國政府ヘ通知セサルヲ得サル旨申述ヘタレトモ、之レニ對シ何等ノ貴答ナシ。

又今回ノ貴信中ニハ獨國外務大臣カ閣下ト會談ノ際、「日本ハ地理上清國ニ隣接スルヲ以テ、貨物ノ運搬等ニ關シ頗ル利益ヲ得ルニ依リ、所謂均霑權ハ獨逸及歐洲各國ノ損害ヲ賠償スルニ足ラス」云々ノ愚説ヲ吐キタリト御陳述相成居候得共、前記二十一日ノ來電中ニハ嘗ニ其説ノ愚ナルコトヲ指點セサルノミナラス、寧ロ反テ其意見ヲ是認セラレシカノ如ク相見エ居リ候(獨國政府ノ行爲ハ「フオン、ブランド」ノ奸計ニ出テシコトヲ知リタルヲ以テ、自由黨新聞ヲ利用シテ之レニ反對セシメタリ云々ノ貴電ハ、五月四日ニ至ツテ初メテ之レヲ接受セリ)

又貴信中所謂直接ノ近因ナルモノハ最モ其謂レナキモノト言ハサルヲ得サル次第ニ有之、例ヘハ帝國政府ニテ軍艦武器ヲ獨逸ヨリ購入セサル一事ノ如キハ、武器ハ格別軍艦ニ至ツテハ是迄曾テ同國ニテ購入セシコト無之、其爲屢々閣下ヨリモ御勸告アリタル位ノ次第ナレハ、若シ此一事ニシテ獨國政府ノ好意ヲ害シ居ルモノトセハ、最初ヨリ帝國ニ向ツテ反對ノ意向ヲ顯ハスヘキ筈ナルニ、前來述ルカ如ク最初ハ至テ好意ヲ有スルコトヲ表示セリ。故ニ之レヲ以テ近因ノ一トハ難被申様被存候、又菊花章頸飾御贈進ノ外頗ル冷淡ナリシト云フハ、如何ナルコトヲ以テ冷淡ナリト認メラレタルコトナルヤ。閣下ニモ御承知ノ通り

我皇室ヨリ菊花章頸飾ヲ外國君主ニ御贈進相成候ハ實ニ希例ノ事ニ屬スレハ、獨逸皇帝ニ於テモ深ク我カ帝室ノ御厚情ヲ感謝セラルヘキ筈ナルニ、此外ニ尙ホ冷淡ノ事アリトテ苦情アルハ近頃其意ヲ得サルナリ。又英國ヨリ同國ニ申込ミタル干涉ヲ退ケタルニ其謝詞ヲ送ラサリシトカイフコトモ、固ヨリ獨逸政府ヲシテ俄カニ我國ニ敵對スル迄ニ變心セシメタル事トモ思ハレズ。菊花章頸飾御贈進及「メツケル」少將敍勳ノコトニ關シ、東京某新聞ニ云々セシトノコトノ如キモ、政府反對黨ノ新聞ノ載スル所ニシテ、何レノ國ニテモ政府ノ行爲ニ付其反對黨ハ誹議論難スルコトハ常ノ事ニシテ、是等政府反對黨ノ載スル所ニ付テ、一々他國ノ苦情ヲ受ケ居ルトキハ、各國トモ日夜其交渉ニノミ忙ハシカルヘシ。今日ノ時勢豈此如キ理アラシヤ。頸飾捧呈ノ爲獨逸公使ヲ廣島ニ於テ引見アラセラレサリシニ付云々トイフニ至ツテハ尙更ノ事ニシテ、當時廣島ノ行在所ハ至ツテ手狹ナルノミナラス、聖上ニハ軍事百端ノ御指揮ニ忙ハシク在セラレタル際ナレハ、何レノ公使ヘタリトモ謁見仰付ケラレタルコト無シ。既ニ露佛兩公使ノ信任狀捧呈ノ謁見ヲモ仰付ケラレサル位ナリ。此等ノ事情ハ在東京獨逸公使ニ於テモ充分承知ノ筈ニ有之候得共、是亦干涉ヲ招クノ一原因ト可相成事トモ不被存、縱シ又萬一斯ル些々タル原因ヨリ獨逸政府カ多少ノ惡感ヲ生シタリトスルモ、閣下ノ外交上ノ經驗ニ依リ之レヲ豫防セラルルハ亦難事ニアラサリシコトト相信候。殊ニ獨逸外務大臣カ帝國政府ニ於テ他國ノ利害ヲ顧ミサリシトカ、獨逸ノ利益ヲ増進セサリシトカ、講和條件ヲ豫メ獨逸ニ協議セサリシトカ云フヲ以テ、其苦情否口實ト爲スニ付テハ、最モ其意ヲ解スルニ苦ム所ノ申條ニ有之、何ントナレハ我國ハ此回清國ト戰爭ヲ爲スニ付未タ曾テ獨逸ト同盟ヲ約シタルコトモナケレハ、又表面獨逸ヨリ何等ノ助力ヲ受ケタルコトモ無シ、然ルニ何ノ理由アリテ獨逸ノ爲ニ謀リ又豫メ彼ニ向ツテ講和條件ヲ協議スルノ必要アルヘキヤ。此等ノ口實ノ如キハ薄弱モ亦甚シト云ハサルヲ得サル次第ニ有之候。要之今回獨逸カ俄カニ變心シテ三國干涉ノ牛耳ヲ取り嚴シク我ニ當リタルハ貴信ニ所謂直接ノ近因ノ爲ニモ非ス、其同國政府ノ唱ヘタル苦情ノ爲ニモ非スシテ、閣下ノ所謂眞ノ原因即チ純然タル其對歐政略ノ爲メナルヘシ。果シテ然リトセハ同國ニ在リテハ諺ニ背ニ腹ハ代ヘ難シト云フニ倅シク、亦萬已ムヲ得サルニ出テタルコトハ推察ニ餘リアリト云フヘシ、而シテ此事實ハ當時高平、加藤兩公使ノ來電ニ據テ十分之レヲ證セラレ候（筆者曰、此二電信ノ要領ハ前記蹇々錄拔萃中ニ掲ケアルニ付、茲ニ之レヲ省略ス）。

此ノ如ク内國政略コソ唯一ノ原因ナリト雖モ、同政府ニテハ是迄我ニ對シ好意ヲ有スルカ如ク表示シ來リタル後故、俄カニ其方針ヲ變スルニハ何等口實ヲ求メサルヲ得ス。是ヲ以テ取ルニモ足ラサル事ヲ摘舉シ、僅カニ干涉ノ名ヲ求メタルハ、今日ニ至テハ寸毫ノ疑ヲ存スル所無之候。

又一言致置度義ハ、貴信中「歐洲列強政府ハ雷ニ今回ノミナラス、將來日本ノ國力益々振興シ、我勢力ヲ擴張スル區域益々廣大ナラントスルニ當リテハ、必ス我ヲ箝制努ムヘキナリ」トノ御來示ニ候得共閣下カ

十月九日ノ來電ニテ、講和條件ハ若シ我ニ於テ朝鮮ヲ拋棄セサルヲ得サレハ臺灣ヲ取り、償金ハ英貨一億磅以上トシ、其一半ハ金貨一半ハ銀貨ニテ拂ハシムヘシ、又朝鮮ヲシテ釜山及附近ノ地ヲ日本ニ割讓

セシムル爲、清國ハ須ラク舊朝鮮國境ニ至ル迄ノ地域ヲ朝鮮ニ讓渡スヘシ。
又十一月二十六日ノ來電ニテ、本使ハ左ノ通り講和條件中ニ加ヘラレンコトヲ勸告ス。

一、清國ハ朝鮮ニ對スル主權ヲ拋棄シ日本之レニ代ハルコト。

二、盛京省及露國ト境ヲ接セサル吉林省ノ大部分並ニ直隸省ノ一部ヲ日本ニ讓與シ、以テ滿韓兩國間ニ凡五千平方里ノ中間地ヲ作り、我カ將來亞細亞ニ於テ威權ヲ專ラニスル爲軍機上ノ根據地ヲ設クルコト。

三、償金ハ英貨一億磅トシ、其一半ハ金貨ニテ拂ヒ、残り一半ハ銀貨ニテ十個年賦ニテ拂フコト。

四、償金支拂迄ハ東經百二十度以東ニ在ル山東省ノ一部分、威海衛及其砲壘兵器共ニ日本軍ニテ之レヲ占領スヘシ。駐兵費ハ清國之レヲ支辨スヘシ。但シ該兵員ハ最初五年ハ一萬五千人、爾後ハ一萬人ヲ超過セサルコト。

此等ノ御勸告相成候末又同日附來電ニテ

歐洲ノ輿論ハ歐洲ノ利害若クハ清國ノ存廢ニ影響ヲ及ホササル限りハ、如何ナル條件ニモ異存ナカルヘシ。

御申越相成候所ト前後相參看スルトキハ、其意味合矛盾シ居ルカ如キ觀アルコトヲ免レスト存候。又閣下ハ「昨年十一月以來本大臣ニシテ在外帝國外交官ニ内示スルニ、講和條件ニ關シ我志望ノ存スル所ヲ以テシ、且ツ時機ニ乘シ歐洲列強中特ニ友情ヲ表スルモノト意見ヲ交換スヘク訓達シタランニハ、歐洲列強中

少クモ一二國ノ歡心ヲ博シ得タルヤ疑ナシ」云々御來示ニ候得共第一今回ノ事ニ付テハ帝國政府ニ於テハ對手國即チ清國トノ關係ノ外延ヒテ他ニ及ホスヲ避クルコトヲ努メタリ。然シナカラ英露兩國政府ニ對シテハ幾分カ意見ヲ交換セシコト有之、又獨國ハ元來極東ニ於テ利害ノ關係少ナキ國柄ナルノミナラス、同國ノ舉動ハ帝國政府ニ於テハ最初ヨリ疑訝ノ間ニ認メ居タルヲ以テ、餘リ進入スルハ得策ニアラスト信セリ。又講和條件云々ニ至テハ最モ云フヘクシテ行ハレサル事ト申スノ外無之、何トナレハ我廟議ハ最初ヨリ日清ノ事局ハ成ルヘク他ノ第三者トノ關係ヲ避クルコトヲ勉メタルノミナラス、其所謂平和ノ條件ナルモノハ我國進勝ノ結果ニ伴フモノニシテ、昨年十一月以來戰爭ノ局面ハ日ヲ逐フテ變遷スルニ從ヒ、其條件モ亦弛張其宜ヲ制セサルヲ得サルヲ以テ、到底清國カ和ヲ求メ來リタル時即最後ノ戰局ノ結果ニ應シテ之レヲ確定セサルヲ得サルモノナル故ニ、豫メ之レヲ内示セサリシトハ無理ナル御希望ト云ハサルヲ得サルヘシト存候。